

退職なさる先生からのメッセーじ

ありがとうございます

奈倉 哲三

その日はさ程寒くはなかった。東上線志木駅に初めて降り、「跡見学園女子大学行」がある西武のバス停前に立つ。時刻表を見て本数の少なさに愕然。「ギリギリかな」との思いで待つも、ほぼ時刻通りに来たバスにホッとして乗る。だが、やけに遠い。予め地図で確認はしておいたが、想像以上に遠い。「あと少しかな」と思ったところで完全な滞となった。そこが旧川越街道に入る大和田交差点の手前で、今のように旧道と川越街道の間が右折二車線にはなっていないため、渋滞の名所であったことなどは知る由もなかった。「わーダメだ、遅刻だ」。

跡見学園女子大学で、「日本思想史」と「日本宗教論」が担当できる教員を公募していると知り、応募し、著書・論文等の業績選考を通過しての、大切な面接審査の日である。

「バスが……」と、初っぱなから「大遅刻」の弁解。だがそんなことは些細なことばかり、拙著『真宗信仰の思想的研究―越後蒲原門徒の行動と足跡』に対する質問が直ちに始まる。なかに、眼光鋭く、背中まである長い髪を後ろで無造作に束ねた方が、次々と放つ質問は、拙著を実に丹念に読まれた上での、極めて的確なものであった。

「これほど読み込んでくれる人が居るところで、もし決まれば、これは有り難い」。また、すぐ正面に座ったやや細面の方が、「岡山からこちらへお移りになりたいご事情は？」と優しく問われたので、「家庭の事情」を説明。そのやりとりのなかに、「新潟のニオイ」を感じた。採用が決まって四月に入ると、長い髪を束ねていた方は、すっかりカッ

トされていた。神山さんであった。事情を優しく尋ねられた「新潟のニオイ」の主は藤崎さんであった。

今は昔、一九九八年十一月か十二月かのある日のことである。

九九年の四月から九十六年間、研究・教育・大学運営、という三分野での専任教員としての仕事で、いちばんの苦手は大学運営であった。長年、四九歳になるまで「非常勤」のみで研究を最優先させてきた人間には、専任職を得た岡山での五年の経験も、まだ組織人としての自覚を深いものにするには不足であった。そんな者が、着任十一年で学部長を引き受けてしまったため、諸先生方・職員の方々に迷惑ばかりかけることになったが、多くの同僚に助けられ、痛む足を引きずりながら（時に車椅子に頼りつつも）どうにかこうにか二年間を切り抜けた。一年目の終わり、三月期入試の判定日、大震災に遭遇した時には学部長室の机の下から職員の方々に救出され、その後は、部活で校内に居た学生たちの「帰宅の足」と「宿泊先」確保に微力を尽くすことが、辛うじてできた。

教育は、思えば二四歳の春に大学を卒業して学習塾で講師を始めてから、中学・高校・大学・大学院と、四九歳の春まで二十五年間、非常勤ばかりではあったが、「教育」で飯を喰い、その後岡山の大学で五年間、跡見で十六年間、計二十一年間、専任教員として飯を喰い、総てあわせて四十六年間「教育」に携わってきたことになる。

最後の授業となった一月二十四日土曜日、三年ゼミを終えた時は、「これで終わったんだな」という以外に何もつぶやき得なかったが、岩田さんをつかまえ、いつものように勝手なお喋りをしている時、「ようやく、学生一人一人の関心と潜在能力を見定め、一人一人にあった指導がどうにか出来るようになってきたかな、というところで《お仕舞い》、まあ、なんでも《これで良し》ということはないのだから、仕方ないか」などと独白、同意を得た。

研究は、そのために生きてきたのだから、これは世を去るまでやる。いよいよこれからが研究三昧の生活だ。

一九七四年の修士課程在学中、学会誌に最初の論文を発表してから七〇年代に著した五本程の「論文」については、私の気持ちとしては「蓋」をしている。八〇年から八一年まで、思想史研究を巡って逡巡し、その間に古文書読みを初歩から勉強しなおし、方法論上の方向転換をして八二年に新潟県蒲原平野での史料調査を開始、あちこちに眠って

いる膨大な史料を探し廻り、発掘した史料から新たな史実を発見し、歴史像を再構成し、そこに民衆の信仰・意識・思想を探っていくという方法は、対象が変わっても今日まで基本的に続いている。

岡山赴任直後に治癒率の低い特定疾患に罹り、跡見に移ってから数年後には足痛が酷くなり、遠方での広範囲にわたる調査は困難となっていた。岡山赴任前に新潟で発見した史料の分析から始まった諷刺史料研究は、史料が首都圏の幾つかの公的機関に集中的に所蔵されていること、跡見に職を得たこと、関心が江戸の民衆意識解明に移りつつあったことなどで、研究対象地域は急速に江戸に絞られてきた。その上で、戊辰戦争諷刺錦絵の解明に本格的に取り組んだことで、現在の研究課題が生まれている。戊辰戦争期の江戸、幕府支配から官軍・新政府支配へと変わる江戸で、何が起き、どんな情報が流れ、どんな意見が発信されたのか、そこにおける江戸・東京の民衆意識はいかなるものか、少なくともあと十年は頑張つてこの研究に専念したい。そのことが、その後の日本近代史における闇から、光明を見いだす糸口となる、と考えるからである。

特定疾患・脊椎間狭窄症・近年の眼病と、結構重たい病を抱えてはきたが、一つ一つを克服する度ごとに、むしろ健康体になってきているように感じている。跡見で十六年間勤めたことで、教育力量も研究力量も多少はついてきた。ただ、「本当の学問」は、と自問すれば、やっと入り口に入ったばかり、というのが実感である。これからも諸学兄のお力を借りることが、間違いなくある。その時はまたよろしくお願い致します。皆さん、有り難う御座いました。

奈倉 哲三（なぐら てつぞう）



【略歴】

（一九四四年一〇月、東京に生まれる）

一 学歴

- 一九七五年三月 早稲田大学大学院文学研究科史学専攻（日本史）修士課程修了。
- 一九七七年四月 東京都立大学大学院人文科学研究科史学専攻（日本史）博士課程入学。
- 一九八五年三月 同大学大学院博士課程単位取得満期退学。
- 一九九〇年十二月 学位 文学博士（東京都立大学人博第43号）を授与される。

二 職歴

- 一九六九年四月の塾講師を振り出しに、区立中学・都立高校で非常勤講師の後、一九九四年三月まで、早稲田大学大学院文学研究科、横浜市立大学大学院人文科学研究科、同大学文理学部、首都大学東京人文学部等々で非常勤講師。
- 一九九四年四月 山陽学園大学国際文化学部教授、一九九九年三月まで。
- 一九九九年四月 跡見学園女子大学文学部教授、二〇一五年三月退職予定。

【業績一覽】

主要著書のほかは、最近著以降の主要論文のみを掲載した。

か 校倉書房。

【単著】

- 一九九〇年四月 『真宗信仰の思想史的研究―越後蒲原門徒の行動と足跡』校倉書房。
- 一九九九年十一月 『幕末民衆文化異聞―真宗門徒の四季』吉川弘文館。
- 二〇〇四年十二月 『諷刺眼維新変革―民衆は天皇をどう見ていた

【共編著】

- 二〇〇七年十二月 『絵解き 幕末諷刺画と天皇』柏書房。
- 一九九一年三月 『角田浜願正寺 年中故事 前編』新潟県巻町教育委員会。
- 一九九三年三月 『角田浜願正寺 年中故事 後編』新潟県巻町教育委員会。
- 一九九六年一月 『新版 史料による日本の歩み 近世編』吉川

弘文館〔分担編集執筆、二〇一二年四月第五刷〕。

一九九六年十二月『岡山県の歴史』ぎょうせい。

〔最近著後、二〇〇八年以降の主要論文〕

二〇〇八年五月「幕末の民衆と天皇」歴史科学協議会編『天皇・天皇制をよむ』東京大学出版会。

二〇〇八年十二月『太政官日誌』の発刊意図とその基本的性格
—《新政府》による江戸民衆意識掌握に関する基礎的研究の一環として—『メトロポリタン史学』第四号。

二〇〇九年十二月「戊辰戦争下《見立ているはたとへ》の概要」至文堂編『国文学・解釈と鑑賞』ぎょうせい。

二〇一〇年三月「もうひとつの戊辰戦争—江戸民衆の政治意識をめぐる抗争（その1）—国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館研究報告』157

二〇一〇年十一月「ことわざから戊辰戦争をみれば」日本ことわざ文化学会編『ことわざに聞く』人間の科学新社。

二〇一二年三月「戊辰戦争諷刺史料の歴史的意味」箱石大編『戊辰戦争の史料学』勉誠出版。

二〇一三年三月「復古記」不採録の諸記録から探る江戸情勢
(1)《家記》慶応三年分の記事を中心に「跡見学園女子大文学部紀要」(48)。

二〇一三年十一月「江戸版『太政官日誌』の刊行開始期と《五榜の揭示》第三札の修正」〔日本学術振興会科学研究補助金成果「『太政官日誌』を対象にした史科学の構築と戊辰戦争期の社会文化論に関する学際的研究」〕。

二〇一四年三月「復古記」不採録の諸記録から探る江戸情勢
(2)《薩摩藩邸焼き討ち事件》の史料的解明その1「跡見

学園女子大文学部紀要」(49)。

二〇一五年三月「予定」『復古記』不採録の諸記録から探る江戸情勢(3)《薩摩藩邸焼き討ち事件》の史料的解明その2「跡見学園女子大文学部紀要」(50)。

なお、雑誌『大法輪』〔大法輪閣、二〇一〇年一〇月号〔同年九月刊〕から二〇一一年五月号〔同年四月刊〕まで、《大法輪カルチャー講座》に「幕末維新と仏教」を八回連載。

〔二〇〇八年以後の学会関連活動〕

〔二〇〇五年四月〕〜二〇〇八年三月まで 国立歴史民俗博物館、共同研究員。《基幹研究》中・近世における生業と技術・呪術信仰〔代表井原今朝男〕。

二〇〇八年一月〜二〇〇九年三月 国立歴史民俗博物館、研究水準外部評価委員。